重監房資料館資料館だより

JYU-KANBO National Museum

くりう

2025.2 No.27

目次

P1　2024 年度企画展「重監房廃止。しかし、その先は？」開催報告
P2　重監房資料館★ 10.27 前橋出張トークイベント開催報告
P2-3 【寄稿】身延町教育委員会生涯学習課　深沢広太氏
綱脇龍妙上人関係資料等継承事業に関して
P4　2024 年度ウォーキングツアー実施報告
P4　2024 年度　来館者統計
P4　お客様の声（来館者アンケートより抜粋）
P4　ご利用案内・アクセス

2024 年度企画展「重監房廃止。しかし、その先は？」開催報告

「重監房廃止。しかし、その先は？」展は、12月22日をもちまして無事に会期終了となりました。会期中には延べ2,900人の方にお越しいただき、ギャラリートークを５回開催できたことのご報告と共に感謝を申し上げます。

借用資料の展示とインタビュー映像

本展の展示構成や内容については、前号『くりう No.26』に掲載した通りです。「園外初公開」と新聞記事にもなりましたが、熊本県の菊池恵楓園から出ることがなかった資料を展示したことで、興味を持ってご見学くださった方が多かったように感じました。証拠不十分のまま殺人の容疑で逮捕されたFさんは「特別法廷」で裁かれ「菊池医療刑務支所」に入れられ、最終的に処刑されました(菊池事件)。そのFさんが無実を訴える直筆のノートを、学生や比較的年齢の若い来館者が真剣に読んでいる姿には心打たれるものがありました。

不治の病だったハンセン病は、戦後は治る病気になり、時勢と共にハンセン病に対する考えは変わります。日本国憲法ではすべての国民に人権があることを謳い、2001年「ハンセン病国家賠償請求訴訟」判決・2019年「ハンセン病家族訴訟」判決共に原告が勝訴しました。検察が菊池事件の再審請求を行わないのは違法という観点から国に賠償を求めた裁判では、2020年に特別法廷については違憲との判決が下りました。それでもなお、偏見・差別が解消されないのは何故なのかを問い、これらハンセン病問題は過去の出来事ではないと気付いてもらいたいというのが本展の趣旨でした。ゆえに、ギャラリートークでは、これらハンセン病問題は現在進行形であること、担当学芸員として展示を通して感じていること、自身の学びを話すようにしました。菊池事件の再審請求に向けて裁判所・検察・弁護士で開かれる三者協議の動向も都度更新してお伝えしました。ちょうど袴田事件の無罪確定のニュースもあり、興味を持ってくださった方が多く、また、現行の再審制度がいかに検察よりかという議論がされた回もあり、まさに展示室内で参加者とトークするライブ感のあるイベントとなりました。不作為であれ、私たち一人ひとりが国家の誤った政策に手を貸してしまったことを自分事として捉えていただく場になっていたら幸いです。

ギャラリートークの様子

「園外初公開」の菊池恵楓園から借りた資料は返却しましたが、パネルは引き続き展示をしております。菊池事件の裁判で、最高裁において口頭弁論が行われることを報じた1956年の新聞記事の写しを新たに展示しています。Fさんが無罪を主張している当時、ハンセン病患者に対する社会がどんな様子であったかを感じていただけるのではないでしょうか。企画展を見逃した、行けなかった…という方、本稿をご覧になって一体どんな展示だったか気になる！という方は、どうぞお越しください。みなさまと一緒にハンセン病問題を学び、考えていきたいと思っております。（鎌田麻希）

重監房資料館★ 10.27 前橋出張トークイベント開催報告

前号「くりうNo.26」でお知らせした通り、去る2024年10月27日に上毛新聞社・群馬県の後援を得て、トークイベント「谺雄二さん、藤田三四郎さん、山下道輔さんの想い出を写真で語る～栗生楽泉園、重監房復元事業と発掘調査、そして多磨全生園～」を開催いたしました。

登壇者は、写真家の黒﨑彰さん、上毛新聞社総務局総務部の角田隼也さんで、司会進行は、当館の黒尾が担当しました。衆議院選挙の投票日と重なってしまったのですが、会場には80余名の方にお越しいただきました。

黒﨑さん、角田さんのお二人は、生まれ年こそ異なってはいますが、国賠訴訟・熊本地裁判決後から、多磨全生園そして栗生楽泉園に通うようになり、入所者の方々との交流を深めていきました。その交誼を結ぶ過程で、黒﨑さんはプロ写真家として、角田さんは後に新聞記者となる視点から多くの人物写真や記録映像を残すことになります。当時はまだ、ご自身の姿を写真に残すことを良しとしない方も多かったはずです。

今回は、重監房資料館の設立やハンセン病関連資料の収集・保存に関して重要な役割を担った上記三人の方を中心に、プライベートな姿までを切り取った写真を提供していただき、スライドショーを行いました。その過程で、その人となりや印象に残ったエピソードについて、お話を伺いました。お話の中には、私たちが「共通の記憶」として次の世代にも伝えなければならないメッセージが込められていたように私は思いました。

トークイベント会場風景

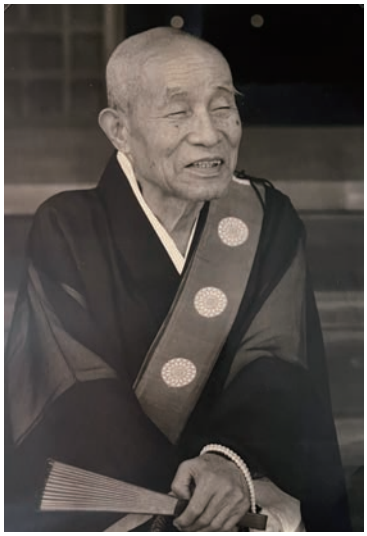
そんな大事なメッセージをここで紹介するには、とても紙幅が足りません。会場にお越しいただけなかった方も大勢いらっしゃいます。そこで重監房資料館ではイベント記録の公開について準備をはじめています。紙媒体で仕上げるか、ＨＰ上にアップするか、その方法について検討中です。詳細が決まりましたらお知らせいたします。乞うご期待。

（黒尾和久）

【寄稿】綱脇龍妙上人関係資料等継承事業に関して

身延町教育委員会生涯学習課文化財担当　深沢広太

日本が日露戦争に勝利し、軍国主義の進展から社会不安が増大していた時代。平和主義を宣教するため上京していた日蓮宗の僧・綱脇龍妙上人（1876-1970）は、明治39年（1906）の夏、身延山久遠寺を初めて参詣した。この時、綱脇上人は身延川の河原で悲惨な生活を送るハンセン病患者たちに出会い、その窮状を見過ごすことができず、救らい事業の道を決意した。これが身延深敬病院の始まりである。病院の名前は法華経常不軽菩薩品の一節、「我深く汝等を敬ふ」からとった。常不軽菩薩は自身が非難や迫害を受けても、相手を憎まず、逆に深く敬う＝常に軽んじない仏で、文学者で篤い法華信者でもあった宮沢賢治が、彼の詩「雨ニモマケズ」の中で、“サウイフモノニワタシハナリタイ”と理想の人としたデクノボーのモデルとされる。綱脇上人はこの教えを心の支えに、病院経営の寄付勧募のため全国各地を奔走した。以来60年以上の歳月をハンセン病患者の救済に尽力し、その功績により昭和43年（1968）に身延町より名誉町民の称号が贈られた。


晩年の綱脇龍妙上人
（写真提供：深敬園）

明治 39 年（1906）身延川河原での出会い (写真提供：深敬園)

山梨県教育委員会が中学生向けに発行した郷土学習教材では「福祉の心を根付かせてくれた綱脇龍妙上人」と題し、その功績が紹介されている。同書では笛吹市旧春日居町出身の小川正子医師も紹介されている。山梨の子どもたちはこの二人を通してハンセン病を知るのである。以前これを読んだ生徒からハンセン病についてより深く学びたいという問合せがあったが、その時教材として十分な資料を提供できなかったという苦い思い出がある。そうした経緯もあり、現在身延町教育委員会では身延深敬園並びに重監房資料館の全面的な協力のもと、綱脇上人の関係資料等の継承事業に取り組んでいる。

関係資料といっても調査対象は様々である。深敬園には寄付勧募台帳や看護医療日誌等の文書資料のほか、古写真・図面等の視覚資料、講堂や火葬場、患者の墓石や慰霊碑等の物的資料も残っている。いずれも綱脇上人の事績や園の歴史とそのあり方を語る上で欠くことのできない一次資料であり、ここで生活を共にした患者や綱脇一族、職員の生きた証に他ならない。

フィールドワーク in 身延深敬園座談会

本事業では資料調査とともに普及啓発イベントも実施してきた。昨年 3 月 16 日には町立総合文化会館で「みのぶ人権フォーラム 2024」を、11 月 30 日には深敬園周辺でフィールドワークを開催した。いずれも黒尾和久重監房資料館部長に講師を依頼し、ハンセン病問題史における深敬園についてご講演いただき、講演後には深敬園施設長で綱脇上人の孫・中里敬子さん、フィールドワークでは元職員・塩沢和代さんを交えて座談会も行い、園の暮らしなど思い出を語り合っていただいた。こうしたイベントは町の広報紙や地元紙でも取り上げられ、少しずつではあるが町民等の関心が高まっている。

ハンセン病は幸い不治の病ではなくなったが、人は未知の病に対して不安やストレスから過度な反応を示すことがある。コロナ禍における「自粛警察」しかりである。繰り返す歴史の中で今とこれからをどう考え、どう生きていくか。綱脇上人の“深敬”の心を想い、自分の中に置いておくことが一つのヒントになるかもしれない。その想いに触れる場として、深敬園という場所や関係資料を当時の記憶とともに継承していきたい。

＊綱脇上人は国立療養所内の日蓮宗会堂の建立にも尽力しており、各地にも上人に関する資料や口伝のエピソードなどが残っていると思います。そうした資料等をご提供くだる方がいらっしゃいましたらぜひ下記事務局までご連絡ください。

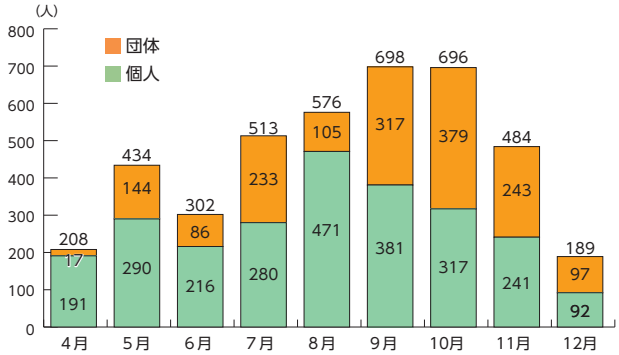
（身延町教育委員会生涯学習課 深沢広太・TEL 0556-20-3017）

2024年度ウォーキングツアー実施報告

本年度もボランティアガイドの案内による、草津町中心部から重監房資料館までのハンセン病にまつわる史跡を徒歩で巡るウォーキングツアー「初めてのハンセン病史-もう一つの草津温泉-」を開催致しました。(9月21日、28日、10月12日)　おかげさまで、キャンセル待ちの応募状況の中、合計22人の方々にご参加頂き、今までとは少し違った、涼しい秋風漂うツアーの催行となりました。引き続き、草津町の温泉情緒の隙間に埋もれている、ハンセン病の深い歴史を紹介してまいります。

(香川進司)

2024 年度来館者統計



2024 年度入館者数（4/1 ～ 12/ 末時点）

延べ	4,100 人
1 日平均	17.6 人
開館以来延べ	55,752 人

ホームページアクセス数（4/1 ～ 12/ 末時点）

2024 年度	29,509 件
開館以来延べ	468,908 件

お客様の声（来館者アンケートより抜粋）

◎ F さんの事件のことや、特別監房の詳しい実体、さらには菊池医療刑務支所など、他で得た知識を補完する形で新しいことを知れたと思う。それと共に、コロナ禍や入管法など今なお政府が同じメンタリティを持ち続けている怖さを感じる。若者の自殺率の高さについても志村康さんが語ったように、憲法裁判所と人権規定がないことに端を発し、生き殺しのような想いをみな抱いているのではないだろうか。　（東京都、25 歳・女、学生）

◎日本では、ハンセン病について資料館に行くときに、ヨーロッパ、ドイツのハンセン病の歴史と比べると驚きます。ドイツにも数世紀前に療養所がよく使われていたけど、こちらは前世紀に重監房まで造られて、ひどいと思います。撤去されたのに、くわしく展示してくれてありがとうございます。

（ドイツ、24 歳・男、大学院生）

◎ミシェル・フーコーの「監獄の誕生」といった近代国家の政策、またナチスの優生思想など様々な事象とのつながりを感じ、大変興味深く拝見しました。こういった傾向は、コロナ禍でのマスク警察（草の根の差別、排除）や相模原の事件を考えると、今もなお形を変えて続いているとも思いました。

（東京都、43 歳・男、会社員）

◎以前に多磨全生園にある資料館を見学したときに、麻酔をしないで外科手術を行われていたとの展示があり、ひどい扱いだと思っていましたが、それ以外にも貴資料館の展示のようなことも行われていたことを知って、驚きました。現在の若い人達は、ハンセン病を正しく理解をして、元患者の人々と入浴したりと交流をしたりするニュースを見て、少しずつでも問題が解決することを願っています。元患者の方々も高齢なので、今後のためにももっと多くの証言を、可能ならば集めてほしいです。

（茨城県、53 歳・男、会社員）

◎ハンセン病患者の人権について、次の世代にもっともっと伝えていく必要性があると感じている。また、今回の見学で、よりその思いが強くなった。コロナの時も、似たような差別が報じられたこともあり、皆が人権の大切さを改めて学ぶためにも、何度でもこちらに来て、周りに伝え続けたい。

（東京都、61 歳・女、教職員）

◎今までハンセン病について、重監房について何も知らなかったため、非常に勉強になった。大学の勉強で、ドイツのアウシュビッツについて勉強して、実際にも行ってきたが、“日本のアウシュビッツ”そのものだと感じた。この経験を次の学びに活かしたい。

（新潟県、22 歳・女、学生）

ご利用案内・アクセス

■開館時間■ 4/26-11/14（通常期）：9：30 ～ 16：30（団体は要予約）
11/15-4/25（冬期）：10：00 ～ 16：00（団体は要予約）
■休 館 日■ 毎週月曜日（祝日の場合は翌日）、国民の祝日の翌日・年末年始・館内整理日
■入 館 料■ 無料
■交通案内■ 鉄道・バス利用の場合　JR 吾妻線長野原草津口駅より草津温泉行バス約 25 分
草津温泉バスターミナル下車　タクシー約 7 分、徒歩約 45 分
車利用の場合　渋川伊香保 IC より約 2 時間 10 分　上田菅平 IC より約 1 時間 50 分
（草津方面からお越しの場合は楽泉園の正門を入らず、その先 200m の未舗装路をお入りください。）

重監房資料館「くりう」第 27 号【季刊】
発行日：2025（令和 7）年　2 月 8 日／企画・編集・発行　重監房資料館／ URL：https://www.nhdm.jp/sjpm/
〒 377-1711　群馬県吾妻郡草津町草津白根 464-1533　TEL：0279-88-1550　FAX：0279-88-1553